

屁

秋も始めごろのある晴れた日の午後であった。春吉君たちは六時間目の工作をしていた。春吉君は粘土で茶飲み茶碗を作っていた。

すっかり茶碗に心を奪われ、他のいつさいのことを忘れていたが、ふと我に返って春吉君は「しまった」と思った。朝から少し腹具合が悪く、何か重いものが下腹いっぱい詰まっている感じで、時々ぶつぶつと豆の煮えるような音もしていたので、油断をすると屁をするぞと心を戒めていたのだが、つい仕事に熱中して、今その屁を音も立てずにしてしまったのである。お陰で腹は軽くなったが、腹が軽くなる程の屁というものは激しい臭気を伴っているはずだと春吉君は思った。

うまく、誰も気づかずにいてくれればよいが、と春吉君は思った。少し時間がたった。春吉君は助かったと思った。

と、そのとたん古道具屋の遠助が「あつ、臭せ！」と第一声をはなった。すぐに、臭え臭えという声が四方に伝わった。春吉君は恥ずかしさで顔がほてってきた。

いつもと同じ騒ぎが始まった。屁えこき虫の石太郎が屁をはなった時と寸分違わぬことが。春吉君はどうしていいのか分らない。もうなりゆきにまかすばかりだ。

やがて古道具屋の遠助が「今日は大根菜屁だ！」と言った。何という鋭敏な嗅覚だろう。確かに春吉君は、今朝大根菜の入った味噌汁を食べてきたのである。

やがて騒ぎが大きくなり出したころ、藤井先生が例によって「誰だっ！」と怒鳴られた。春吉君は意味もなく粘土をひねりながら息をのんで面をふせた。みんなの視線が、ちょうどいつも石太郎の上に集中するように、今日は自分に注がれているのだと思いつつ。今にどこから「春吉だ！」という声が起こってくるに相違ないと思った。

そういうふうにつきつかり観念していたので、「石だ、石だ！」という誤った声があがったときには、自分の頭上に落ちてくるはずのげんこつが脇へ外れたように、ほつとした奇妙な感じになった。

顔をあげてみると、意外にもみんなの視線は春吉君に集中されておらず、やはり石太郎の方に向いているのだ。

藤井先生が黒板の裏にかかっている鞭を取って、つかつかと石太郎の前に歩いてゆかれる。春吉君の心の底から正義感がむくつと起きてきた。「自分だ」と言ってしまうおうか、しかし、誰ひとり自分を疑ってはいないのである。ここで白状するのは何とも恥ずかしい。

先生が石太郎の席に達するまでの短い時間を、春吉君の中で正義感と羞恥心とが目まぐるしく闘争をした。それが春吉君の動悸を、鼓膜にどきどきと響くほど激しくした。

そしてしばらく正義感が押さえられた。

反射的に粘土を親指と人差し指の腹ですりつぶしながら、春吉君は見ていた。石太郎はいつも変わらず、照れた顔を机に近くゆすっていた。今に、「俺じゃない」と弁解するかと、春吉君がひそかに恐れながら期待していたのに、その期待も裏切られた。

石太郎は鞭でこめかみをぐいと押され左へぐにやりとよろけたが、依然照れたような表情で沈黙しているばかりである。春吉君が、仕方なく自分の罪を白状させられる機会は、ついに来なかった。これで騒ぎはすんでしまった。一同は再び作業に取りかかった。

しかし、春吉君だけは、ことがまだ終末に至っていない。気持ちに背負いきれぬほどの負担ができてしまった。春吉君には「こんな経験は生まれてはじめてといつてよい。春吉君は今ままで、自分は正しい優れた人間であると自分のことを思っていた。

「今、自分が沈黙を守つて、石太郎に濡れ衣を着せておくことは、これは正しいことではない。自分は堂々と言うべきである。今からでもよい。さあ今から。」その口の中で言いながら、どうしても立ち上がる勇気が出ないのであった。

春吉君はくやしきあまり泣きたいような気持ちになってきた。それをはぐらかすために、できあがつていた大事な茶碗をぐつと握りつぶしたのである。

* * * * *

まったくこれは春吉君にとつて、この世における最初の自分で処理せねばならぬ悩みであった。

それは家へ帰つてからも、次の日学校に再び来るまでも、またその後もずっとしつこく春吉君の後をつけてきた。

(新実南吉全集「屁」より抜粋…文言等一部改作)

A〔正直、誠実〕

アトリエの思い出

レオナルドとアントニーは幼いころからの友達で、二人は絵を描くことが大好きだった。二人とも、画家として活やくする夢を見ていた。

やがて、二人は有名な絵画の学校に入学した。大好きな絵を勉強するために一生けんめいに働いて学費をはらい、わずかに残ったお金を出し合って小さなアトリエを借りた。そのアトリエで夢中に絵をかいいたり、将来の夢やおたがいの絵について熱心に語り合ったりした。アトリエでの時間は、二人にとって大切なかけがえのないものであった。

学校を卒業してすぐに、レオナルドに大きなチャンスがおとずれた。かれの応ぼした絵が、大きなコンクールで大賞を取ったのである。レオナルドは、真つ先にそのことをアントニーに伝えた。アントニーは自分のことのようにとても喜んだ。

「レオナルド、すごいじゃないか。君は、ぼくの自まんの友達だよ。このチャンスを大切にするんだぞ。」

大賞をとったレオナルドは、またたく間に有名画家となった。かれの絵は高値で売れ、生活は一変した。いろいろな人たちとの付き合いが増えたかれは、いつしかアントニーと会うこともなくなっていた。

レオナルドの活やくを心から喜んでいたアントニーは、それでよいと思った。

十年後、レオナルドは有名なコンクールのしん査員となっていた。

「今年の絵は、どれもすばらしいですな。」

審査員たちは口ぐちにそう言い、応ぼされた絵のレベルの高さに感心していた。多くの絵の中で、最終選考に二つの作品が残った。レオナルドは、この最終選考のしん査員を任されていた。どちらもすぐれた作品ではあったが、きれいな色づかいで獨創性に富んだ絵に、レオナルドは心をひかれた。

（こんなにすばらしい絵は見たことがない。この絵を大賞にえらぼう。）

大賞にえらぶ絵を決めたうえで、今一度、もう一方の絵に目をやったレオナルドは、はっとした。絵のすみに小さく書かれていたので分かりづらかったが、よく見ると、それは見覚えのあるサインだった。

（アントニーの絵だ！）

なつかしいサインを目にして、レオナルドの心は大きく揺れた。会わなくなっても、アントニーのことをずつと気にかけていたレオナルド。かれには冷静なしん査はできなかった。すばらしいと思う絵を選ぶのか、それとも、友達のアントニーの絵をえらぶのか…。

迷いに迷ったすえ、レオナルドはアントニーの絵に票を入れた。接戦であった最終選考で、レオナルドの票が明暗を分けた。アントニーの絵が大賞をとったのである。

その夜、応ぼ用紙からアントニーの連絡先を知り、レオナルドは興奮気味に電話をした。

「よくこゝが分かったね。君から電話をかけてくれるなんてうれしいな。」

アントニーは、なつかしい友達の声にとっても喜んだ。

「君の絵がコンクールで大賞をとつたことを、一刻も早く伝えたくてね。」

「それは本当かい。しかし、なぜ君がそのことを知っているんだい？」

「実は、あのコンクールのしん査にたずさわっていたんだよ。あれは君の絵だと、サインを見て分かった。今回はすばらしい絵がたくさんあって、ぼくも迷ったよ。でも、友達の力になれて本当によかった。」

その話しぶりから、アントニーにはしん査時のレオナルドの心の中が容易に想像できた。しばらくのちんもくの後、

「そうだったのか…。」

そう言うと、アントニーは力なく受話器を置いた。しばし、ぼう然と立ちつくしたアントニー。かれの目から一筋のなみだがすうつと流れ落ちた。

電話がきれたあとにようやく、レオナルドはアントニーの気持ちに気が付いたのだった。

数日後の授賞式に、アントニーの姿はなかった。レオナルドは、かざられていた大賞の絵を複雑な気持ちで見つめていた。

アントニーの絵の題名は「アトリエの思い出」だった。

植木 洋（道徳実践事例集：小学館）

B（友情、信頼）

ひよこの話

これは、わたしの小さいころの話です。

たしか五年生になったばかりの、ぽかぽかあたたかい日でした。

近所の友達と、学校帰りに、いつもひと休みしていく場所がありました。そこは、通学路わきの一けん家の近くで、その家の横に、いつもきれいな水の流れている小川があるのです。

その日も、小川の岸にこしを下ろして休んでいると、一けん家の庭のすみに、ひよこの箱が置いてあるのが目につきました。

「あつ、かわいい。ひよこだよ。」

「何羽いるのかな。」

みんなで、のぞきこむようにして、箱の中のひよこを数え始めました。ところが、ひよこが親鳥の羽の下にかくれるので、なかなか数えられません。一人が「九羽だ。」と言うと、一人が「十羽だ。」と言います。わたしは「十一羽だ。」と言いだし、とうとうけんかみたいになつてしまいました。

「それなら外に出して数えよう。」

と、わたしが言いました。

「そんなことしたら、おこられるぞ。にげ出したらどうする。」

みんなは止めたけれど、負けずぎらいだったわたしは、自分の言った十一羽の数をたしかめたくて、ひよこの箱を開けてしまいました。

ひよこは、次から次へと出てきました。

「一、二、三、四、……それ、やつぱり九羽だ。」

けれど、十一羽と言ったわたしは気がすまず、竹ぎれを拾ってきて、親鳥の羽の下をつつきました。くうつと体をゆすつた下から、二羽のひよこがとび出しました。

「ほら見ろつ、ぼくの言ったとおり十一羽だ!」

わたしは、得意になって言いました。

その時です。そばの道をトラックが、すごいいきおいで通りすぎていきました。アツと思った時にはもうおそかったのです。親鳥がけたたましい声で鳴くと同時に、十一羽のひよこは、四方八方へぱつと散つてしまったのです。

それからどうなったのか。わたしたちはふり向きもせず、かげだしていました。

その家が見えなくなるところまで来て、ほつと一息ついた時、わたしだけがあの家の所に、かばんを置きわすれてきたのに気づきました。(しまった。)と思っただけれど、引き返すよりしかたがありません。わたしは一人です。ごうごうその家の近くまでもどつていきました。そつと様子をうかがうと、家はシーンと静まり返っています。

(家の人は、まだもどっていないんだ。見つからずにすむかもしれない。)

と思つて、かばんを置いた所へ行きましたが、かばんはありません。こまったなと思つて見回

すと、庭のすみに置いたはずのかばんが、ちゃんとえん側に置いてありました。
(しまった。見つかっている。)

わたしのむねはどきどきしました。家の中は静かです。わたしは足音をしのばせるようにして、かばんに近づきました。

その時です。ガラスとしようじが開いて、いつも見かけるおばあさんが、めがね越しに、じろつとにらみました。

「ひよこを出したのは、おまえさんだろ。」

わたしは思わず、

「ぼくじゃない！」

と言ってしまいました。

「それなら、だれだね。おまえさんは知っているだろ。」

それは、すべてを見通しているような声でした。

わたしは顔を真っ赤にしながら、

「ぼ、ぼくじゃない。友達です。友達が、ぼくの止めるのもきかずに開けてしまい、そして、ぼ

くに代わりにあやまって「いと言っただんです。」

と、全くぎやくのことを言ってしまいました。

おばあさんは、そんなわたしをじつと見つめていましたが、

「そう、おまえさんじゃなかったのかい。でも、そのお友達は、ひきようだね。ひよこを出した

「こともよくないが、そういうときに、すなおにあやまりに来られないというほうが、ずっ

とよくない。このおばあさんがそう言っていたと、伝えておおき。」

と言いました。

思わずついてしまったうそですが、その時のはずかしかったこと。わたしは子ども心にも、

おばあさんの気持ち、ひしひしと伝わってくるのを感じました。

「うそをついたって、わかるよ！」

と、しかりもせず、わたしを信じるふりをして、何かを伝えようとしたのです。

その時、わたしは、二度とあんないたずらはするまいと思いました。

しかし、わたしは毎日、その家の前を通らなければなりません。ときどき、おばあさんを見

かけられるのですが、そのたびにむねがしめつけられるように思いました。とうとうある日、

わたしはたえられなくなつて、

「うそをついてしまいました。ゆるしてください。」

と言わずにおれなくなりました。

ところが、おばあさんはおこらずに、

「正直はいいことだ。正直はいい。わすれるんじゃないよ。」

と言って、わざわざおくから、古い新聞紙にせんべいを包んで持ってきてくれました。

その時のおばあさんのやさしかった声。その声が、やさしくひびけばひびくほど、わたしの心はふるえました。そして、泣くまい、泣くまいとこらえているのに、せんべいの包み紙の上に、

ポトポトなみだが落ちました。

そのおばあさんは、もうとつくになくなったと聞きました。けれども、わたしには、あの時のおばあさんのすがたが目に焼きついてはなれません。

(戸田唯巳… 教育出版道徳副読本 5 年生)

(A [正直、誠実])

まちがい く大記録をかけた投球く

ピッチャーが、9回試合終了までヒットを打たれずフォアボールを出さず、野手もエラーをせずに、全てのバッター27人を連続アウトにしてしまうことを、「完全試合」とよぶ。

このようなことは、なかなか起こることではないから、達成すると大記録となるわけだ。ゆえに、完全試合はピッチャーとして最高の名誉とされている。

特に、アメリカのメジャーリーグではすごいバッターがたくさんいるから、なかなか完全試合が生まれることはない。多くのピッチャーが、あと一人というところで涙をのんできた。日本においても同様で、近年、ジャイアンツのピッチャーがあと一球というところでフォアボールを出し、涙をのんだ。

アウト、セーフを判定する審判も真剣である。自分が出した判定で試合が左右されるわけだから、責任をもって判定する。特に、メジャーリーグの審判はプライドが高く、決めた判定を変えることはない。

これから始まるお話は、実際にメジャーリーグで行われたタイガース対インディアンス戦のことである。

試合は、9回ツーアウト、インディアンスの攻撃。タイガースのピッチャー アルマインド・ガララーガ投手は、このバッターをアウトに取れば、「完全試合」達成だ。試合を見に来た観客やテレビを見ている人たちは皆息をのんで、その完全試合の瞬間を見守っている。

もちろん、ガララーガ投手と同じチームのメンバーも、今まで経験したことのないような大きな緊張感に包まれている。言うまでもなく、一番ドキドキしているのはガララーガ投手本人だ。このバッターをアウトにすれば、完全試合達成だからである。

ついに、その時がきた。

ガララーガ投手は、最後の一球を投げた。

打った。ファーストゴロだ。

「アウト、完全試合達成だ。」

と、ガララーガ投手が笑顔で審判の方を見た瞬間、審判の手が横に広がった。「セーフ」

ガララーガ投手の顔から、笑顔が消えた。審判のジョイスさんは、「セーフ」と判定したのである。もちろんアウトだと思ったタイガースの監督も、審判のジョイスさんに対して抗議をした。しかし、その抗議は受け入れられず、セーフの判定はアウトには変わらなかった。試合はそのまま続けられることになり、ガララーガ投手は、次のバッターをアウトにして試合には勝ったものの、「完全試合」とはならなかった。

試合後、ガララーガ投手は家で、セーフとなったそのシーンを何度も見た。「20回もビデオを見たが、絶対にセーフとは言えない。」とくやしがあった。

「セーフ」の判定をした審判のジョイスさんも、ガララーガ投手と同じく試合後、セーフと判定した場面をビデオで見た。そこで、自分の誤りに気がついたのであった。

あれは、セーフではなく、アウトだと……。

次の日、同じくタイガース対インディアンスの試合が行われた。その試合が始まる前に、審判のジョイスさんは、ガララーガ投手のもとへ行き、昨日の判定のことを謝った。

しかし、判定はくつがることはない。

ジョイスさんの謝罪を受けたガララーガ投手は、

「完全な人間は、誰もいない。」

そう言っ、審判のジョイスさんの肩を抱きとめた。

ジョイスさんの目には涙が満ちていた。

中野 学 ……参考資料 「読売新聞」

(B [相互理解、寛容])

☆ジョイスさんの内面を丁寧に追及していくとねらいとする価値の理解に迫れるように思う。